



Market Monthly

2022年6月

アジア・マーケット・マンスリー

※当資料は「アジアリサーチセンター」のレポートを基に作成しています。

2022年5月 マーケットの振り返り

【株式】まちまち、【通貨】まちまち、【債券】概ね金利上昇

【株式市場】

米国発の株安に押されるも後半は持ち直し

米連邦準備制度理事会（FRB）による金融引き締め強化と米国の景気後退懸念を背景に、月初から世界的な株安がアジアに波及した。その後は米国債利回りが落ち着いたこと、上海のロックダウン解除が発表されたことから悲観論が後退、月末にかけて反発した。中国政府による景気下支えへの期待感から、中国本土、香港、台湾が上昇したほか、大統領選挙の終了で不透明感が薄れたフィリピンも小幅プラスとなった。一方、前月に相場操縦、企業トップ逮捕、汚職などのスキャンダルで急落していたベトナムは個人投資家の信用買いの解消が続き下落したほか、インフレ高進を受けて予想外の利上げが行われたインドでは海外投資家の売りが膨らんで軟調な展開となった。

【通貨（対米ドル）】

まちまち

主要アジア通貨の対米ドルレートはまちまちとなった。上海のロックダウン解除期待からNIESの通貨は反発した。また、中国景気の底打ち期待、豪州準備銀行のタカ派姿勢を受けて、豪ドルは最も上昇した。インフレ加速、貿易赤字拡大からインドルピーは最も下落した。

【債券（国債）市場】

多くの国で金利上昇

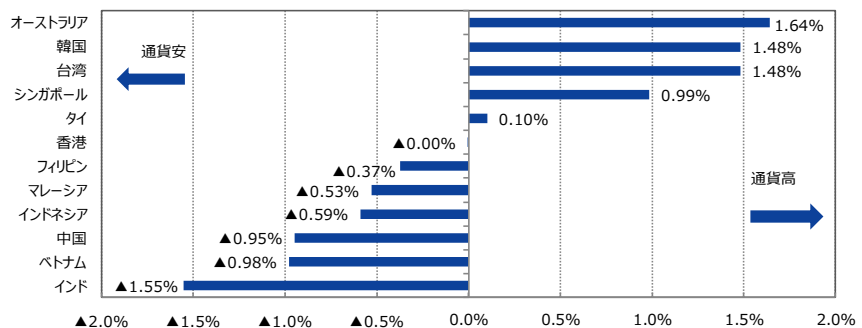
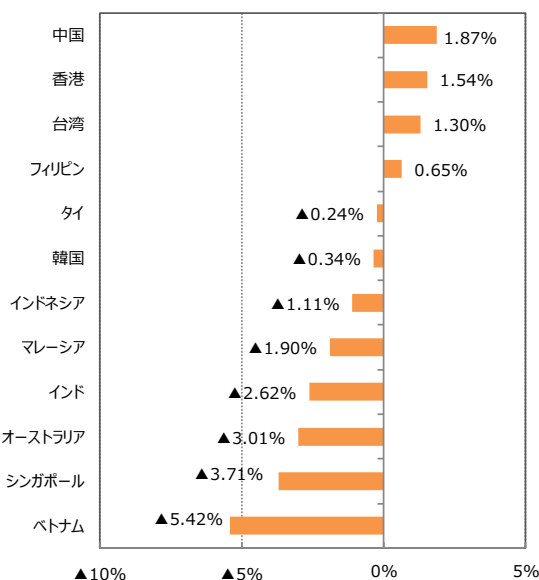
アジア国債利回りは概ね上昇した。オーストラリア、インド、韓国では5月に利上げが実施され、中央銀行によるインフレ抑制に向けた引き締め継続スタンスが懸念され長期金利上昇につながった。一方で、マレーシアでも利上げが実施されたが、4月までの長期金利上昇の反動もあり金利上昇傾向一服となった。

アジア：マーケット動向

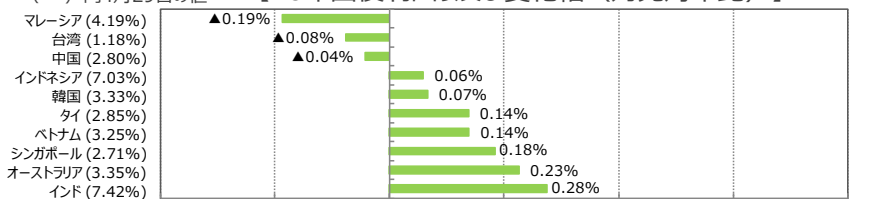
2022年5月31日時点

【株価指数変化率（対先月末比）】

【為替変化率（対米ドル、先月末比）】



() 内4月29日の値 【10年国債利回り及び変化幅（対先月末比）】



(注1) 2022年5月31日を基準に、先月末比は2022年4月29日からの騰落率。

(注2) 各国の株価指数の名称はP10の参照ページに記載。(出所) Bloombergのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

この資料の巻末ページに重要な注意事項を記載しております。必ずご確認ください。

上記は当資料作成基準日現在のものであり、将来の成果および市場環境の変動等を示唆あるいは保証するものではありません。将来予告なく変更される場合があります。

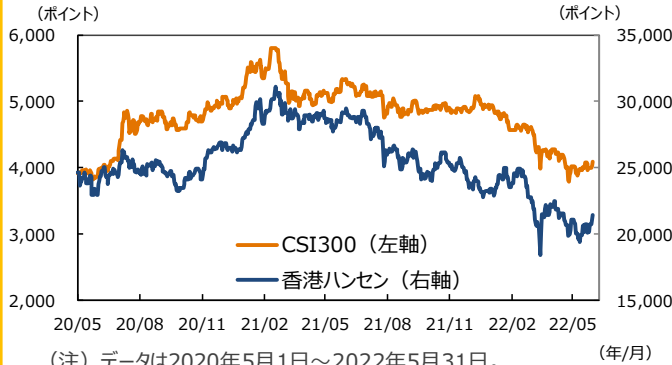


三井住友DSアセットマネジメント

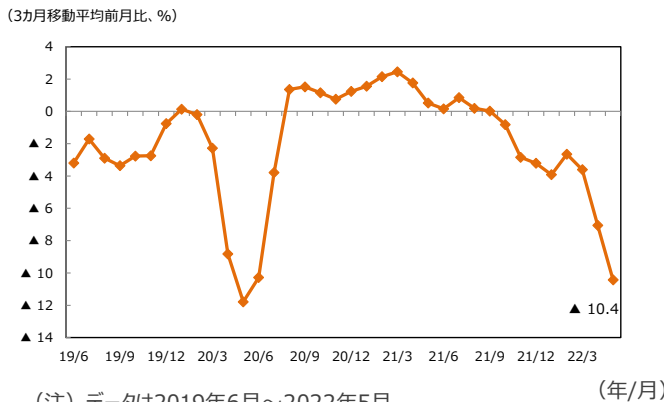


中国 <金融市場動向>

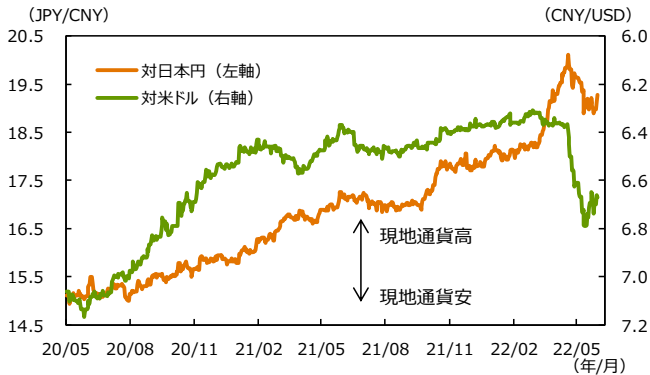
上海/深圳CSI300と香港ハンセン指数



企業業績予想変化



為替レート



株式は底入れ、金利はレンジ内の推移、人民元は反転上昇

【株式市場】

政策効果の発現とともに年後半は上向き見込み

月初は米国発の株安に押されたほか、4月の経済指標の弱さも悪材料視された。しかし**景気下支え策が矢継ぎ早に発表されたこと**、政府高官が**プラットフォーム企業への支援を強調したこと**、**上海市当局が6月から社会・経済活動を正常化させると発表**したことから、**政策効果発現への期待**が次第に優勢となり反発した。アリババ集団を始めとする**プラットフォーム企業の3月期業績が市場予想を上回ったこと**も投資家心理を好転させた。これまでの株価調整で**業績下方修正リスク**は織り込み済みと考えられる。投資戦略については、**構造的な成長分野の有力企業、政策のサポートを得ている企業、国際競争力のある企業、増配が期待できる企業**に着目し、**再生エネルギー、環境問題の解決、EV関連、国産化が進展する電子材料や基幹部品**などを長期目線で有望視するスタンスに変わりはない。

【為替・債券（国債）市場】

人民元は反転上昇

4月下旬以降、米ドルに対して比較的速いペースで下落していた**人民元は5月中旬に反転**した。上海市の全域ロックダウン解除期待がきっかけである。上海市は各種規制を徐々に緩和しており、**景気底打ち期待を考慮すれば、一方的な下落局面は一服したと判断**する。

債券利回りはレンジ内での推移

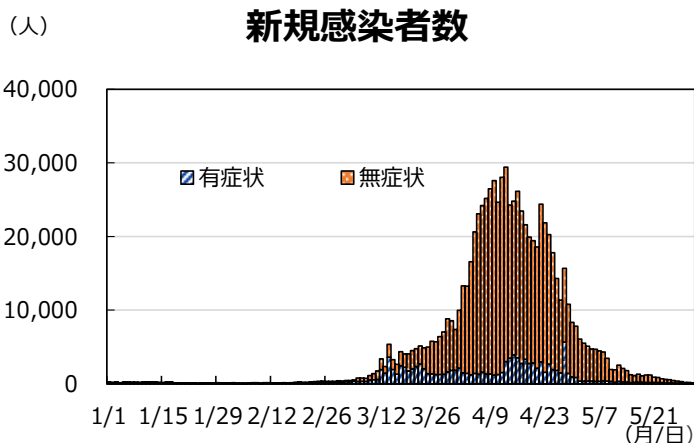
上海のロックダウン解除や経済対策を背景に、年後半の景気回復に焦点が当たり国債利回りには**上昇圧力**がかかりやすい。しかし、景気回復を支援するために**緩和的な金融政策が継続されること**で、**中国国債利回りの上昇余地も限られレンジ内で推移すると想定**する。

※個別銘柄に言及していますが、当該銘柄を推奨するものではありません。



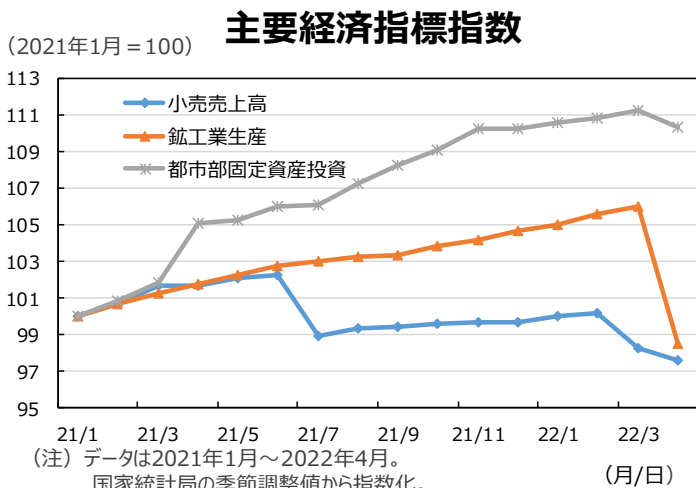


中国 <マクロ経済動向>



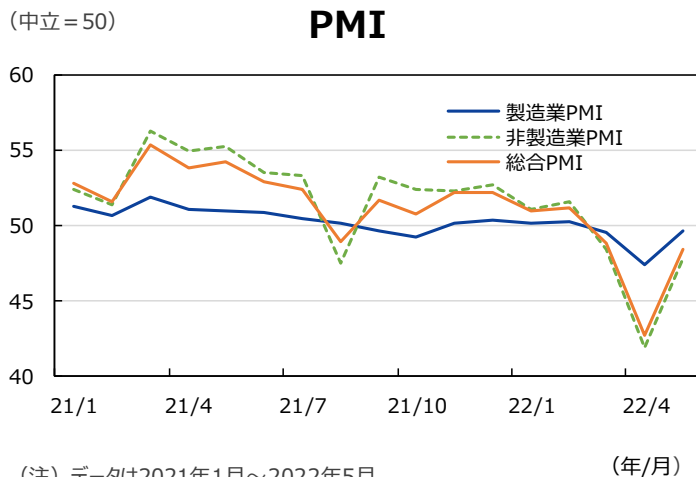
(注) データは2022年1月1日～5月31日。

(出所) CEICのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成



(注) データは2021年1月～2022年4月。
国家統計局の季節調整値から指数化。

(出所) CEICのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成



(注) データは2021年1月～2022年5月。

(出所) CEICのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

景気は4月に底打ち コロナ感染者数が減少傾向

中国では3月に入ってオミクロン型の変異株を中心に感染が主に上海市で爆発的に拡大した。4月中旬にピークアウトした模様である。**上海市は全域ロックダウンを6月1日に解除**した。上海市は感染拡大初期に対策が後手に廻ったことが全域ロックダウンの長期化を招いた。他方、上海市は全域ロックダウン解除前の時点でゼロコロナの定義を事実上緩和した。今後は**感染初期段階で早めに対応策を講じること、ゼロコロナの定義を徒に厳しくしないことで、経済への負荷を小さくする事例が増えそう**だ。

自動車を中心に生産が悪化

4月の主要経済指標は総じて下振れた。特に**鉱工業生産は前年同月比▲2.9%**と急減した。品目をみると、自動車が同▲31.8%と大幅に下振れたが、これは、自動車の主要生産地である長春市と上海市が4月に全域ロックダウンを行ったためである。長春市は4月下旬に全域ロックダウンを解除し、上海市もすでに全域ロックダウンの解除に向けた各種緩和を行っていることから、サプライチェーンの機能低下に伴う生産サイクルの大底は4月と判断する。一方、**ゼロコロナ方針を受けて、地方政府がいつ大規模な全域ロックダウンに踏み切るかという漠然とした不安が消費低迷の背景**にある。**上海市が日常生活を取り戻すにつれて、こうした不安はある程度緩和され、消費は緩やかに持ち直す**と考えられる。

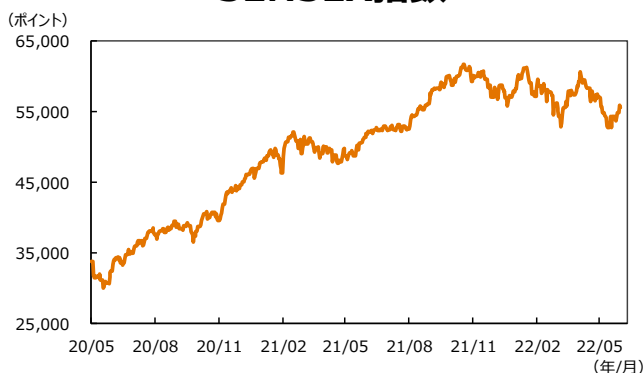
総合PMIが上昇

5月の非製造業PMIは市場予想を上回り、総合PMIは48.4へ上昇した。長春市の全域ロックダウンが解除されたことで自動車生産が底打ちしたとみられること、上海市が全域ロックダウンを継続しながらもサプライチェーンの制限を緩和し始めたためだ。また、上海市がゼロコロナの定義を事実上緩和させたことから、全域ロックダウン解除に向けた期待感が醸成されたことから消費センチメントも底打ちしたと判断する。更に、李克強首相は5月25日、**中央政府、地方政府の役人10万人超に対して、景気を立て直す重要性を直接語り掛ける形で、景気対策の即時実施を指示**した。22Q2中に景気はいったん底打ちになりそう



インド <金融市場動向>

SENSEX指数



(注) データは2020年5月1日～2022年5月31日。
(出所) Bloombergのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

10年国債利回り



(注) データは2020年5月1日～2022年5月31日。
(出所) Bloombergのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

為替レート



(注1) データは2020年5月1日～2022年5月31日。
(注2) 対米ドルは逆目盛。
(出所) Bloombergのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

株式は上値重い、金利は上昇余地、ルピーには下落リスク

【株式市場】

成長見通しに不透明感が台頭

臨時会合での利上げを受けてインフレ高進が消費の減速や補助金拡大を通じて財政悪化に波及するリスクと意識され、海外投資家の売りが加速した。国内供給を優先させるために鉄鋼製品に輸出関税を課す決定がなされたことも、インフレが企業収益に悪影響を与える具体例として投資センチメントを冷やした。当面は原油を始めとする一次産品市況に左右され易く、株式の上値は抑えられる展開となろう。

【債券（国債）市場】

国債利回りは上昇余地あり

継続的な利上げ実施が見込まれるため、インド国債金利は上昇余地が残ると想定する。インド国内のインフレ上昇圧力は強く、準備銀行は景気に配慮しつつインフレ率が中期目標に収まるよう金融緩和策の軽減を進めていくため、長期金利上昇につながりやすい。

【為替市場】

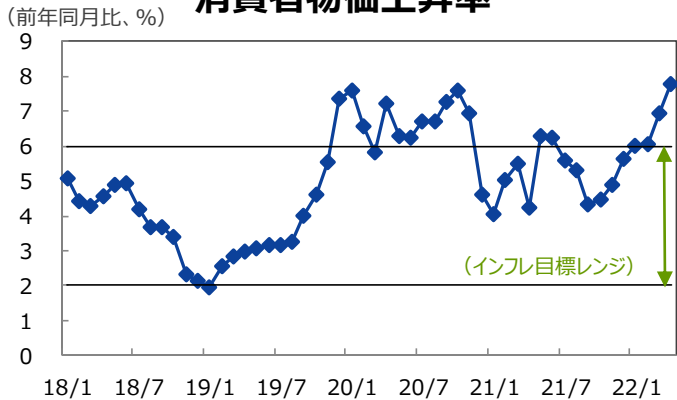
ルピー下落リスクに引き続き留意

21年7-9月期より景気が持ち直し局面に入っていることから輸入数量は拡大基調に入っており、経常収支は再び赤字拡大基調に戻つつあるとみられる。また、停戦合意のハードルが高いためロシアのウクライナ侵攻が長期化するとの見方もあり、この場合には原油市況の高止まりに伴い、ルピーには再び下落圧力がかかるだろう。準備銀行は5月4日に臨時決定会合で、政策金利を4.00%から4.40%へ引き上げた。**金融政策スタンスが足元の緩和から引き締めへ向かっていくことは米国との金利差の視点からルピーの支援になりうるが、外国人投資家が株式・債券を売り越す場合には、ルピーにはやはり下落圧力がかかりやすくなることに留意したい。**



インド <マクロ経済動向・政策>

消費者物価上昇率



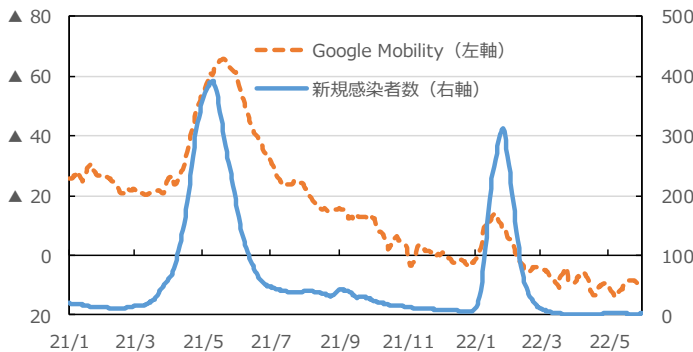
(注) データは2018年1月～2022年4月。
(出所) CEICのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

インフレ上振れリスク

消費者物価上昇率はターゲット超え

4月の消費者物価上昇率は前年同月比+7.8%と、4カ月連続でインフレターゲットを上回った。インドネシアのパーム油輸出規制は5月下旬に解除されたものの、期待インフレ率は上振れしやすくなっている。22/23年度の政府予算案では補助金が大幅に削減されているため、ロシアによるウクライナ侵攻の長期化によって原油価格が再び上昇基調に戻る場合には、インフレ率は上振れしやすくなるだろう。

(ベースケース = 0) 感染と人流 (千人)

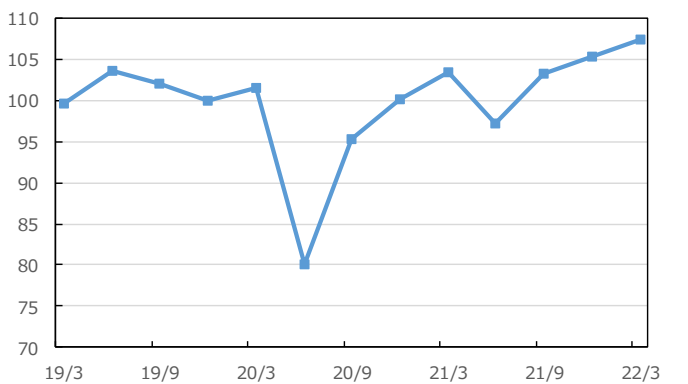


(注) データは2021年1月1日～2022年5月31日。
7日移動平均。Google Mobilityは小売・レク分野で逆目盛。
(出所) CEICのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

感染抑制で消費持ち直し

2021年4-6月にデルタ型によって感染拡大したことでインドでは結果的に多くの人が抗体を獲得したとみられる。年明けにはオミクロン型によって感染拡大したものの短期間で収まり、1月下旬以降には新規感染者数は減少傾向にある。感染抑制を受けて、Google Mobilityは改善傾向を示唆しており、消費センチメントが改善していると判断する。一方、上記のように、徐々に期待インフレ率は上昇しやすくなっており、リベンジ消費の流れを抑制するように作用するだろう。景気回復の流れには変化はないだろう。

(19Q4=100) 実質GDP指数



(注) データは2019年1-3月～2022年1-3月。季節調整値。
(出所) Bloombergのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

景気の回復基調続く

1-3月期の実質GDP成長率は前年同期比+4.1%と市場予想を上回った。弊社で季節調整を行い、コロナ禍以前の2019年10-12月期を基準(=100)に指数化したところ、2022年1-3月期には107.4と、コロナ禍以前の水準を3四半期連続で上回り、かつ、上昇傾向を示した。4-6月期には、昨年の感染拡大のベース効果で、前年同期比成長率は2桁増と判断する。消費持ち直しに伴う民間投資の持ち直しが見込まれること、2022/23年度には政府が公共投資に十分な予算を配分していること、を考慮すると、投資の持ち直しも相俟って景気回復の流れは変わらないと判断する。

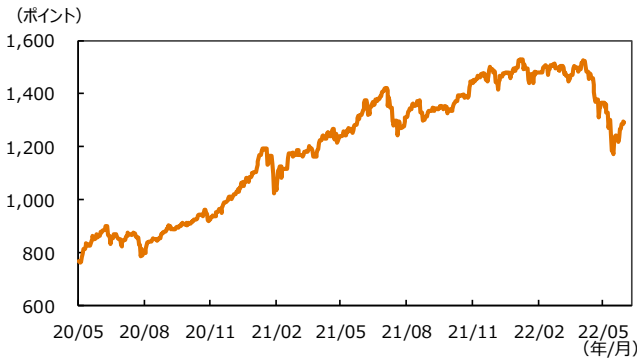
※個別銘柄に言及していますが、当該銘柄を推奨するものではありません。



ベトナム

ピックアップマーケット

VN指数



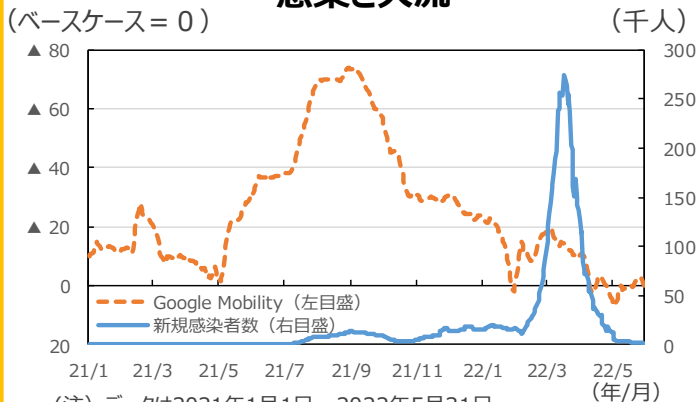
(注) データは2020年5月1日～2022年5月31日。
(出所) Bloombergのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

ベトナムドンと人民元



(注1) データは2020年5月1日～2022年5月31日。
(注2) 逆目盛。
(出所) Bloombergのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

感染と人流



(注) データは2021年1月1日～2022年5月31日。
7日移動平均。Google Mobilityは小売・レク分野で逆目盛。
(出所) CEICのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

※個別銘柄に言及していますが、当該銘柄を推奨するものではありません。

株価は持ち直し、為替は安定

【株式市場】

調整一巡後は再び上昇へ

月初は4月のスキャンダルの余波で個人投資家の信用買い解消の売りが続いた。一方不正に関与したとされる当局者の処分が発表され、遅延していた証券取引所のシステム刷新の迅速化が命じられると、市場の透明性が高まるとの評価から、中旬を底に反発した。海外投資家買いに転じたこと、大手格付け機関が国家格付けを引き上げたことも好感された。企業業績は好調、バリュエーションは割安なことから、落ち着きを取り戻そう。

【為替動向】

ドンは比較的安定推移する見込み

ベトナムドンの対米ドルレートは、比較的安定的に推移した。海外から直接投資の流入というプラス要因に加え、資本取引には規制が多いことから、海外資本の流れの変化を相対的に受けにくい。ドンの対米ドルレートは今後も比較的安定推移する見込みである。経常収支は21Q2に赤字に転じたが、ロックダウン解除を受けて21Q4に黒字に転じた。ウイズコロナ方針では21Q3のようなロックダウンに伴う生産急落という事態は回避出来るため、経常収支は再び黒字基調に戻るだろう。

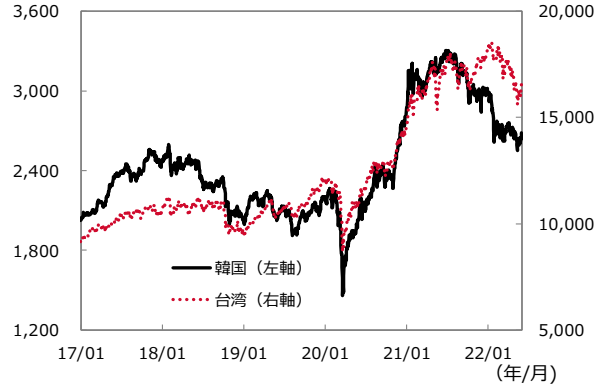
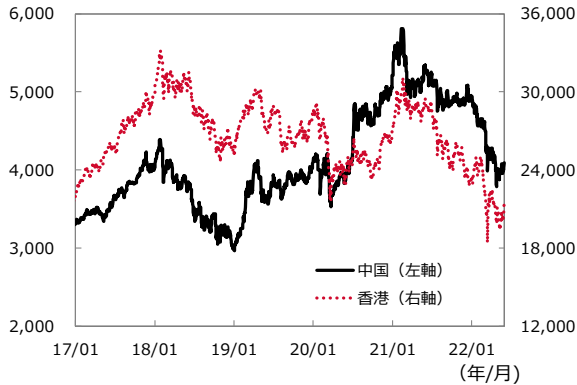
【マクロ経済動向】

感染抑制で消費持ち直しへ

3月にオミクロン型によって、1日当たり40万人を超える感染爆発を経て、ようやく感染は収まりつつあり、5月下旬には7日移動平均で千人台へ減少した。Google Mobilityの7日移動平均は5月下旬にややマイナス圏となったものの、小売売上高を見ると、1-3月の前年同期比+12.1%から1-4月には同+22.6%へ加速した。政府は2022～23年に2021年GDP比で約4%の景気対策費を準備していることもあり、景気は消費を中心に回復局面を続けると予想する。

主要アジア各国・地域株価指数推移

(ポイント) **中国、香港 現地通貨建て株価指数** (ポイント) (ポイント) **韓国、台湾 現地通貨建て株価指数** (ポイント)

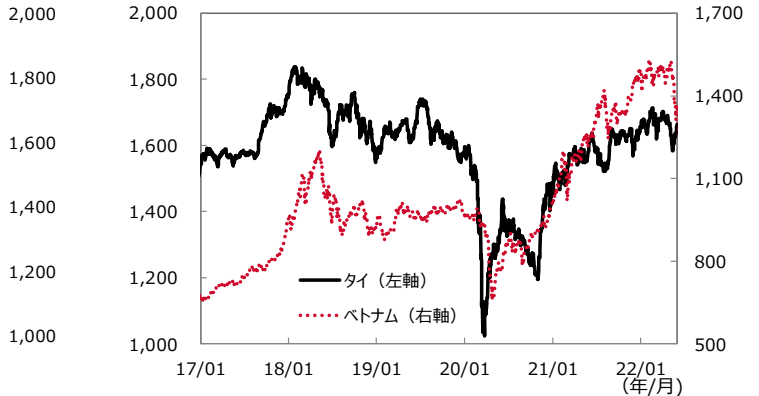
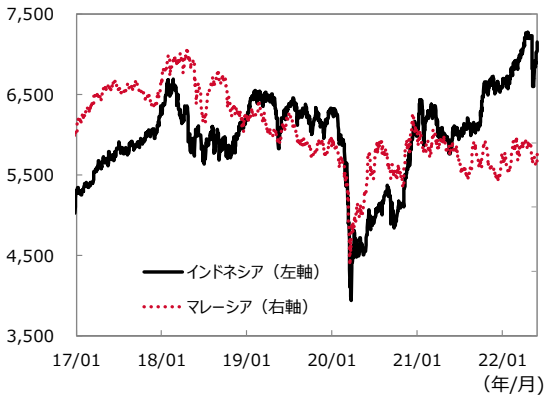


インドネシア、マレーシア

タイ、ベトナム

(ポイント) **現地通貨建て株価指数**

(ポイント) (ポイント) **現地通貨建て株価指数** (ポイント)

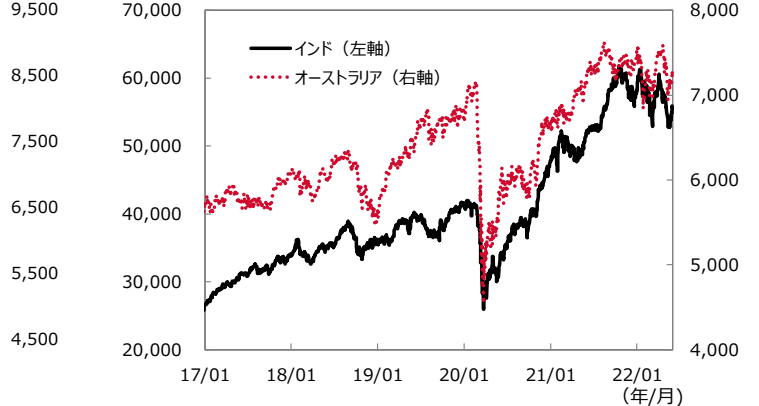
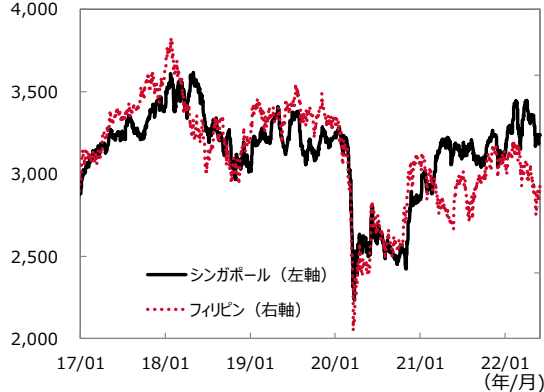


シンガポール、フィリピン

インド、オーストラリア

(ポイント) **現地通貨建て株価指数**

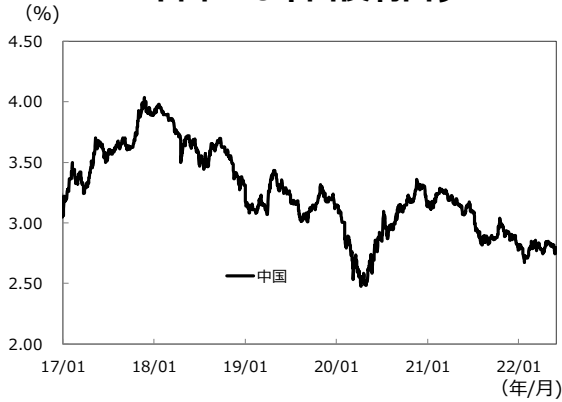
(ポイント) (ポイント) **現地通貨建て株価指数** (ポイント)



(注1) データは2017年1月1日～2022年5月31日。
 (注2) 各国の株価指数の名称はP10の参照ページに記載。
 (出所) Bloombergのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

主要アジア各国・地域10年国債利回り推移

中国 10年国債利回り



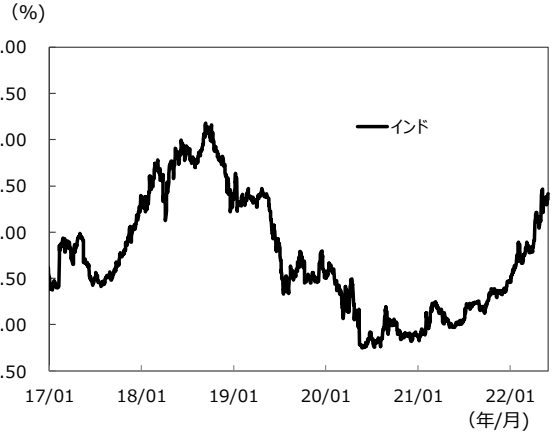
韓国、台湾 10年国債利回り



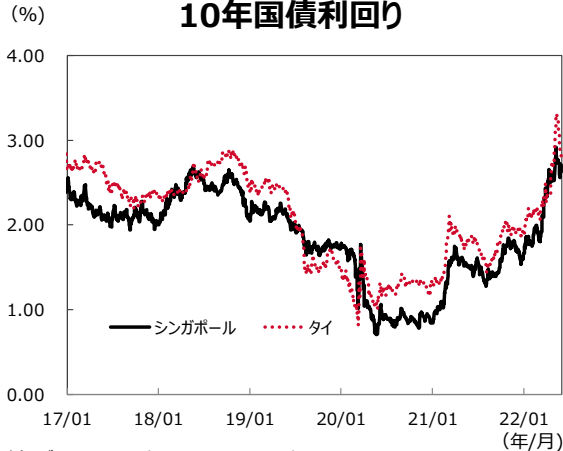
インドネシア、マレーシア 10年国債利回り



インド 10年国債利回り



シンガポール、タイ 10年国債利回り



オーストラリア 10年国債利回り



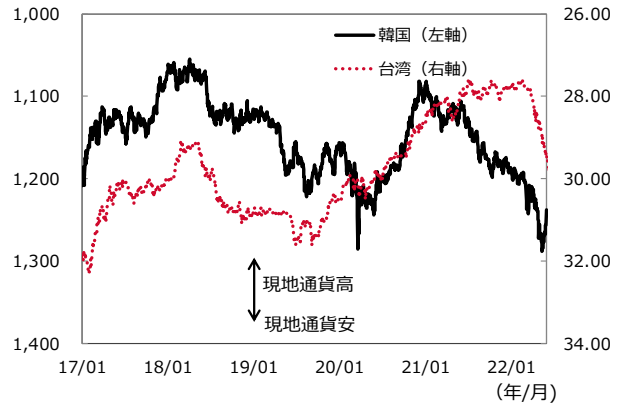
(注) データは2017年1月1日～2022年5月31日。
 (出所) Bloombergのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

主要アジア各国・地域為替レート (対米ドル)

(CNY/USD) **中国、香港 為替レート** (HKD/USD)

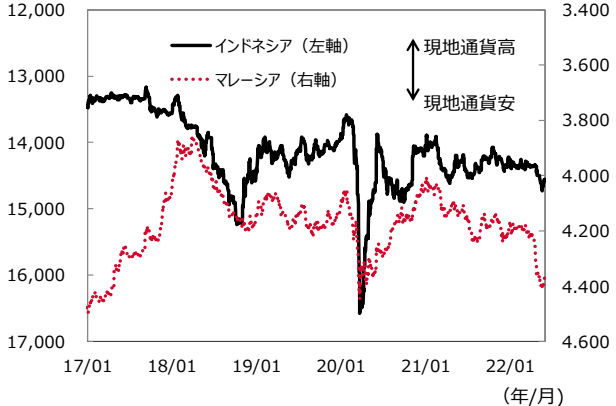


(KRW/USD) **韓国、台湾 為替レート** (TWD/USD)



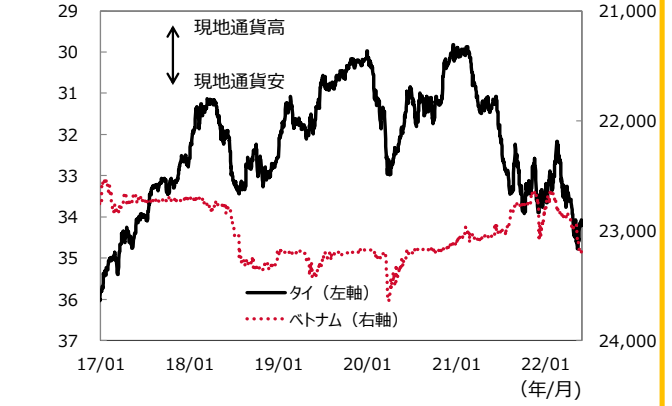
インドネシア、マレーシア

(IDR/USD) **為替レート** (MYR/USD)



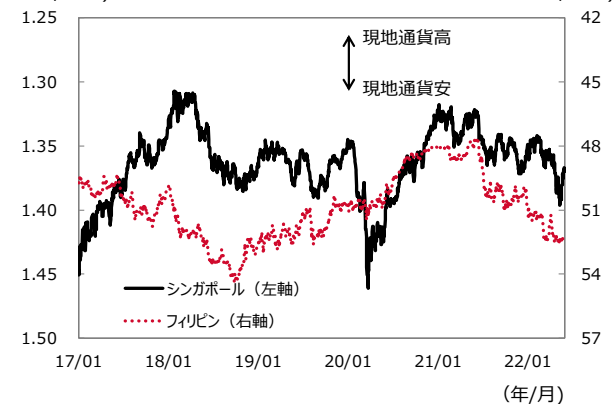
タイ、ベトナム

(THB/USD) **為替レート** (VND/USD)



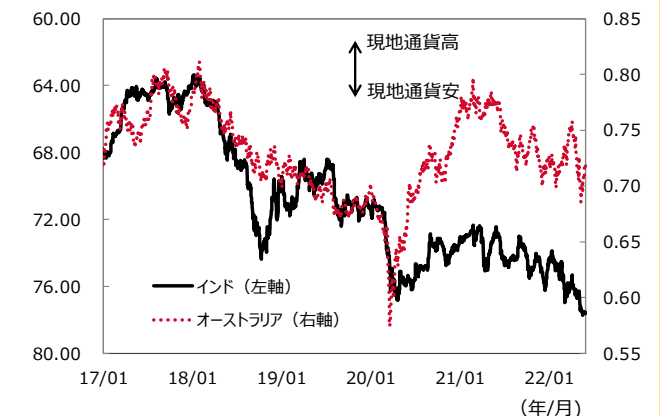
シンガポール、フィリピン

(SGD/USD) **為替レート** (PHP/USD)



インド、オーストラリア

(INR/USD) **為替レート** (USD/AUD)



(注) データは2017年1月1日～2022年5月31日。
(出所) Bloombergのデータを基に三井住友DSアセットマネジメント作成

参照

- P1、P7各国の株価指数の名称は下記の通り。
 - 中国：上海/深圳CSI300指数、●香港：ハンセン指数、●韓国：韓国総合株価指数
 - 台湾：台湾加権指数、●インドネシア：ジャカルタ総合指数、
 - マレーシア：クアラルンプール総合指数、●タイ：SET指数、●ベトナム：ベトナムVN指数
 - シンガポール：シンガポールST指数、●フィリピン：フィリピン総合指数、
 - インド：SENSEX指数、●オーストラリア：ASX200指数

無登録格付に関する説明書

格付会社に対しては、市場の公正性・透明性の確保の観点から、金融商品取引法に基づく信用格付業者の登録制が導入されております。これに伴い、金融商品取引業者等は、無登録格付業者が付与した格付を利用して勧誘を行う場合には、金融商品取引法により、無登録格付である旨及び登録の意義等を顧客に告げなければならないこととされております。

○登録の意義について

金融商品取引法第66条の27に基づき信用格付業を行う法人として登録を行った信用格付業者は、同法に基づき、概要以下の規制に服するとともに、報告徴求・立入検査、業務改善命令等の金融庁の監督を受けることとなりますが、無登録格付業者は、これらの規制・監督を受けておりません。

1. 誠実義務

2. 業務管理体制の整備義務

専門的知識・技能を有する者の配置等、業務の品質を管理するための措置、投資者と自己又は格付関係者の利益相反を防止する措置、その他業務の執行の適正を確保するための措置

3. 名義貸しの禁止

自己の名義をもって、他人に信用格付業を行わせることの禁止

4. 禁止行為

- ①信用格付業者又はその役員・使用人と密接な関係を有する格付関係者が利害を有する事項を対象として信用格付を提供すること
- ②信用格付に重要な影響を及ぼす事項について助言を与えている格付関係者の信用格付を提供すること
- ③その他投資者の保護に欠け、又は信用格付業の信用を失墜させること

5. 格付方針等の作成、公表、及び遵守の義務

6. 業務に関する帳簿書類の作成・保存義務

7. 事業報告書の提出義務

8. 説明書類の縦覧義務

業務の状況に関する事項を記載した説明書類の公衆縦覧等情報開示義務

○格付会社グループの呼称等について

- ①格付会社グループの呼称：ムーディーズ・インベスターズ・サービス・インク（以下「ムーディーズ」と称します。）

グループ内の信用格付業者の名称及び登録番号：ムーディーズ・ジャパン株式会社 金融庁長官（格付）第2号

- ②格付会社グループの呼称：S&Pグローバル・レーティング（以下「S&P」と称します。）

グループ内の信用格付業者の名称及び登録番号：S&Pグローバル・レーティング・ジャパン株式会社 金融庁長官（格付）第5号

- ③格付会社グループの呼称：フィッチ・レーティングス（以下「フィッチ」と称します。）

グループ内の信用格付業者の名称及び登録番号：フィッチ・レーティングス・ジャパン株式会社 金融庁長官（格付）第7号

○信用格付を付与するために用いる方針及び方法の概要に関する情報の入手方法について

①ムーディーズの場合

ムーディーズ・ジャパン株式会社のホームページ

(https://www.moodys.com/pages/default_ja.aspx) の「信用格付事業」をクリックした後に表示されるページにある「無登録業者の格付の利用」欄の「無登録格付説明関連」に掲載されています。

②S&Pの場合

S&Pグローバル・レーティング・ジャパン株式会社のホームページ

(http://www.standardandpoors.com/ja_JP/web/guest/home) の「ライブラリ・規制関連」の「無登録格付け情報」

(http://www.standardandpoors.com/ja_JP/web/guest/regulatory/unregistered) に掲載されています。

③フィッチの場合

フィッチ・レーティングス・ジャパン株式会社のホームページ

(<https://www.fitchratings.com/site/japan/regulatory>) の「規制関連」セクションにある「格付付与方針等」に掲載されています。

○信用格付の前提、意義及び限界について

1. 信用格付の前提

信用格付を行うための十分な質及び量の信頼しうる情報が入手できていることが前提となります。但し、格付業者は監査又は独自の検証を行うものではなく、利用した情報の正確性、有効性を保証することはできません。信用評価の基礎となるものは、債務不履行の蓋然性、債務の支払の優先順位、債務不履行時の回収見込額、信用力の安定性等です。

2. 信用格付の意義

信用格付とは事業体の債務不履行の蓋然性及び債務不履行が発生した場合の財産的損失に関する現時点での意見です。信用評価の結果として表示される記号等は、概ねAAA、AA、A、BBB、BB、B、CCC、CC、C、Dであり、BBB以上の格付は、債務を履行する能力が高いものとされるのに対し、BB以下の格付けは、債務を履行する能力が比較的低く、投機的要素が強いとされます。

短期債務の信用格付については、概ねA-1、A-2、A-3、B、C、Dであり、B以下の格付は、投機的要素が強いとされます。

3. 信用格付の限界

信用評価の対象には、市場流動性リスク、市場価値リスク、価格変動リスクなど、信用リスク以外のリスクに関する事項は含まれません。また、信用格付は、特定の証券の購入、売却、又は保有を推奨するものではありません。

＜重要な注意事項＞

【投資顧問契約及び投資一任契約についてのご注意】

●リスクについて

投資一任契約に基づき投資する又は投資顧問契約に基づき助言を行う金融商品・金融派生商品は、金利・通貨の価格・金融商品市場における相場その他の指標の変動により損失が生じるおそれがあります。

投資する有価証券等の価格変動リスク又は発行体等の信用リスク、金利や金融市場の変動リスク、十分な流動性の下で取引を行うことができない流動性リスク等（外貨建て資産に投資する場合は為替変動リスク等）があります。これにより運用収益が変動しますので、当初投資元本を割り込むことがあります。

受託資産の運用に関して信用取引または先物・オプション取引（以下デリバティブ取引等）を利用する場合、デリバティブ取引等の額は委託証拠金その他の保証金（以下委託証拠金等）の額を上回る可能性があり、金利・通貨の価格・金融商品市場における相場その他の指標の変動により委託証拠金等を上回る損失が発生する可能性があります。

委託証拠金等の額や計算方法は多様な取引の態様や取引相手に応じて異なるため、デリバティブ取引等の額の当該委託証拠金等に対する比率を表示することはできません。

●手数料等について

1. 投資顧問報酬

投資顧問契約又は投資一任契約に係る報酬として、契約資産額（投資顧問報酬の計算に使用する基準額）に対してあらかじめ定めた料率*を乗じた金額を上限とした固定報酬をご負担いただきます。

*上記料率は、お客さまとの契約内容及び運用状況等により異なりますので、あらかじめ記載することができません。契約資産額・計算方法の詳細は、お客様との協議により別途定めます。また、契約内容によっては上記固定報酬に加え成功報酬をご負担いただく場合もあります。

2. その他の手数料等

上記投資顧問報酬のほか、以下の手数料等が発生します。

(1)受託資産でご負担いただく金融商品等の売買手数料等

(2)投資一任契約に基づき投資信託を組み入れる場合、受託資産でご負担いただくものとして信託財産留保額等、並びに信託財産から控除されるものとして信託報酬及び信託事務の諸費用*等

(3)投資一任契約に基づき外国籍投資信託を組み入れる場合、信託財産から控除されるものとして外国運用会社に対する運用報酬・成功報酬、投資信託管理・保管会社に対する管理・保管手数料、トラスティ報酬、監査費用及びその他投資信託運営費用等

※投資一任契約資産に投資信託を組み入れる場合、若しくは組み入れることを前提とする投資信託の場合の諸費用には、投資信託の監査費用を含みます。

これらの手数料等は、取引内容等により金額が決定し、その発生若しくは請求の都度費用として認識されるため、又は運用状況等により変動するため、その上限額及び計算方法を記載することができません。

3. その他

上記投資顧問報酬及びその他の手数料等の合計額、その上限額及び計算方法等は、上記同様の理由により、あらかじめ表示することはできません。

《ご注意》上記のリスクや手数料等は、契約内容及び運用状況等により異なりますので、契約を締結される際には、事前に契約締結前交付書面によりご確認下さい。

【投資信託商品についてのご注意（リスク、費用）】

●投資信託に係るリスクについて

投資信託の基準価額は、投資信託に組み入れられる有価証券の値動き等（外貨建資産には為替変動もあります。）の影響により上下します。基準価額の下落により損失を被り、投資元本を割り込むことがあります。運用の結果として投資信託に生じた利益および損失は、すべて受益者に帰属します。したがって、投資信託は預貯金とは異なり、投資元本が保証されているものではなく、一定の投資成果を保証するものでもありません。

●投資信託に係る費用について

ご投資いただくお客さまには以下の費用をご負担いただきます。

- ◆直接ご負担いただく費用・・・購入時手数料 上限3.85%（税込）
 - ・・・換金（解約）手数料 上限1.10%（税込）
 - ・・・信託財産留保額 上限0.50%
- ◆投資信託の保有期間中に間接的にご負担いただく費用・・・信託報酬 上限年 2.255%（税込）
- ◆その他費用・・・監査費用、有価証券の売買時の手数料、デリバティブ取引等に要する費用（それらにかかる消費税等相当額を含みます。）、および外国における資産の保管等に要する費用等が信託財産から支払われます。また、投資信託によっては成功報酬が定められており当該成功報酬が信託財産から支払われます。投資信託証券を組み入れる場合には、お客さまが間接的に支払う費用として、当該投資信託の資産から支払われる運用報酬、投資資産の取引費用等が発生します。これらの費用等に関しましては、その時々取引内容等により金額が決定し、運用の状況により変化するため、あらかじめその上限額、計算方法を具体的には記載できません。

※なお、お客さまにご負担いただく上記費用等の合計額、その上限額および計算方法等は、お客さまの保有期間に応じて異なる等の理由によりあらかじめ具体的に記載することはできません。

【ご注意】

上記に記載しているリスクや費用項目につきましては、一般的な投資信託を想定しております。費用の料率につきましては、三井住友DSアセットマネジメントが運用するすべての投資信託における、それぞれの費用の最高の料率を記載しております。投資信託に係るリスクや費用は、それぞれの投資信託により異なりますので、ご投資をされる際には、販売会社よりお渡しする投資信託説明書（交付目論見書）や契約締結前交付書面等を必ず事前にご覧ください。

投資信託は、預貯金や保険契約と異なり、預金保険・貯金保険・保険契約者保護機構の保護の対象ではありません。また登録金融機関でご購入の場合、投資者保護基金の支払対象とはなりません。

投資信託は、クローズド期間、国内外の休祭日の取扱い等により、換金等ができないことがありますのでご注意ください。

[2022年3月31日現在]

- 当資料は、情報提供を目的として、三井住友DSアセットマネジメントが作成したものです。特定の投資信託、生命保険、株式、債券等の売買を推奨・勧誘するものではありません。
- 当資料に基づいて取られた投資行動の結果については、当社は責任を負いません。
- 当資料の内容は作成基準日現在のものであり、将来予告なく変更されることがあります。
- 当資料に市場環境等についてのデータ・分析等が含まれる場合、それらは過去の実績及び将来の予想であり、今後の市場環境等を保証するものではありません。
- 当資料は当社が信頼性が高いと判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。
- 当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。
- 当資料の内容に関する一切の権利は当社にあります。本資料を投資の目的に使用したり、承認なく複製又は第三者への開示等を行うことを厳に禁じます。
- 当資料に掲載されている写真がある場合、写真はイメージであり、本文とは関係ない場合があります。

三井住友DSアセットマネジメント株式会社

金融商品取引業者関東財務局長（金商）第399号

加入協会：一般社団法人投資信託協会、

一般社団法人日本投資顧問業協会、

一般社団法人第二種金融商品取引業協会